

# 川いろいろ

「人生いろいろ」であるから、「川いろいろ」となる。

当「鯨のネタ・噺のネタ」ページにおいて、所謂「川」に関して、振り返ってみると、2015/03/13に公開した「忘却」に始まり、「忘却 その②」、「川紀行」、「虹の架け橋建設法（案）強行採決される」、「虹の架け橋建設法（案）来世側の拒否により、承認されず」、「談義所にて」、「川模様」、「川議論（予算委員会より）」、直近の「川風情」まで9話。当文で10話。立ち止まって、今後について考察してみた。

十人十色、人それぞれ。まして、自分自身の来世への道筋に「川」を渡ることはないのかも知れないが、「川」については、気にはなるし、興味はある。

他の人にとって、「川」を全く意識しない方もいらっしゃるであろうし、来世への道筋が、こうであると決めつけられるものでもない。なぜなら、立証不可能だから。

ここで、渡るとされる「川」と現実にある現世の「河川」について比較してみよう。もし、【これは川ではない、滝だ】だったら。いやだねえ。向こう岸（渡るべき来世）まで辿り着くには、えらく難儀が想定され、もう一度”死”を覚悟しなければならない。実際、当河川は、富山県常願寺川。【】内は、内務省技術顧問ヨハネス・デ・レーケが、この川を視察した際の印象談とされている。橋の無い所で対岸へ渡るの、不可能。

もう一つ、【大河】大きな川。幅が広くて、水量も多い川。現実のアマゾン川河口域やガンジス川河口域のように対岸が見えない場合。間違えると、対岸に辿り着けない。

【大河小説】大河のように長い年月に渡る歴史を書き綴った小説。（Web上より引用）

一人の人間の歴史。まずまず思い通りになった方。自らの想いとは裏腹に、運命に翻弄されてしまった方。何れにしても、その人の人生の歴史は尊重されなければならない。

ここまで、「川」の描写を短文に記してきたが、その過程において、”坐忘”なる未知の言葉を知り、その”坐忘”から「生きているのではなく、生かされている」という真理を知り、人間とは「人の”間（あいだ）”」と書くことから、「一人では（社会的に）生きることはできない」と思い、辞書を紐解くと、広辞苑第五版には「②（社会的存在として人格を中心に考えた）ひと。」とあった。そして、”現世滞留者”が生まれた。

ここに、人生も”後半である”と自覚はしている人間様の、何れは必ず訪れる「尊厳ある死」に対する漠然とした恐怖や、死後に行き着く世界が、全く分からないことに起因する不安に支配され、「生ある今を精一杯生きる」ことを疎かにしている自分がいる。

「川」を描写し、想像することにより、様々な人間の人生を称えたいし、その終焉が多様となる事実も出来る限り、ありのまま伝え続け、そして、人間として成長したい。